



ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成17年10月20日

通巻44号

第8回下水文化研究発表会が開催されます

ふくりゅう 43 号でお知らせしましたように、下記要領で第 8 回下水文化研究発表会が開催されます。研究発表論文には 23 編の応募をいただきました。各分科会バランスよく論文が集まりました。応募いただいた方々に御礼申し上げます。今回は関西在住の会員から多くの応募をいただきました。開催地を関西としたことの効果が現れたとみることができます。

また、今回は「下水文化を見る会」を 6 年ぶりに復活します。研究発表会翌日、流通科学大学長山雅一教授のご案内で大阪上町台地を中心に水にゆかりの地を巡ります。

詳しい内容については、同封の開催要領を参照のうえ、ふるって参加申込みをしていただきたいと思います。

2. 開催要領

日時：11 月 26 日（土） 9：20－17：00

会場：アピオ大阪

〒540-0003 大阪市中央区森ノ宮中央 1-17-5
地下鉄中央線、JR 環状線「森ノ宮」駅下車すぐ

基調講演：奈良文化財研究所 松井 章氏

演題『古代宮都と汚水処理－屎尿と汚水処理』

研究発表（各分科会の応募論文キーワードを紹介します）

セッション 1：下水文化史（悪水、背割堤、会所地、下

水溝、東京下町、漫画、汚物掃除法、大震災、人命救助）

セッション 2：海外下水文化（水汚染、エコトイレ、緑の革命、国際協力、環境教育、汚水処理、民営化）

セッション 3：下水文化活動（ひと・くらし・自然、稲作、協働、杜家町、環境学習、地域社会、古都、まちづくり）

セッション 4：下水文化研究（公共性・私的性、水循環、雨水利用、高度処理、処理水利用、修景、保水型都市）

パネルディスカッション：「水環境と歴史」

パネリスト：松井章氏（奈良文化財研究所）、長山雅一氏（流通科学大学）、神吉和夫氏（神戸大学）、栗田彰氏（日本下水道文化研究会）、山崎達雄氏（京都府、日本下水道文化研究会）、山野寿男氏（日本下水道文化研究会）

コーディネーター：勝矢淳雄氏（京都産業大学）

※研究発表会終了後懇親会を開きます。

下水文化を見る会

大阪上町台地・水に関する遺跡を巡る

日時：11 月 27 日（日）、9:00（アピオ大阪集合）～15:00

訪問先（予定）：太閤下水、難波宮跡、古代の排水設備（NHK敷地内）、船場町界隈、適塾など

※下水文化を見る会のみの参加も歓迎します。

2005 バルトン忌が開催されました

8 月 7 日（日）に行われました 2005 年バルトン忌は、例年どおりの暑い一日でしたが、午前の墓前行事には 30 名程度が参加し、墓前献花、記念写真撮影を行いました。

午後は会場を銀座区民館に移し、島根県立松江工業高等学校教諭 岡崎秀紀先生による「松江市水道の父 W.K.バルトンの活動と業績」と題する講演が行われました。話題は、松江市におけるバルトン先生の足跡から、スコットランド論、チベットとコナンドイルの関係、モンゴル論にまで広範な領域に及び、極めて有益かつ啓発的なものでした。会場では、岡崎先生から、バルトン先生ゆかりの松江産「古代水」の提供もありました。

なお、松江郷土館では、「松江を訪れた外国人たち」というテーマで、4 月 1 日から 8 月 31 日までの期間、バルトン、ラフカディオ・ハーン、バーナード・リーチなど 7 名の松江での足跡についての展覧会も開催中だそうで、その意味でも極めてタイムリーな講演となったと思います。バル



トン先生は、1856 年 5 月 11 日、スコットランドで生まれており、来年 2006 年は生誕 150 周年にあたるということから、今回は拡大的なメモリアル行事も企画したいと考えております。

（運営委員 椿本祐弘）



講演中の岡崎秀紀氏とバルトン先生の墓前にて



雨水東京国際会議に参加して

本会代表 酒井 彰

今年8月1日から7日まで、雨水東京国際会議が開催されました。本会はこの会議に協賛するとともに、実行委員会構成団体として参加してきました。

会議は大盛況で、7日間の述べ参加者は2,100人にのぼったということです。国際会議の名にふさわしく海外からの参加者も13カ国48人を数えました。市民が原動力となって、これだけの規模と多彩で充実した内容の会議が運営できたことは賞賛に値すると思います。運営側の一員になれたことはたいへん良い経験にもなりました。

11年前に開催されたときは、雨水利用国際会議でしたが、雨水を利用させてもらっている人間からの視野に偏りすぎているのではないかという辰濃実行委員会会長の意見から、「利用」が外れています。そういう意味で、辰濃会長の基調報告では、大規模ダムや下水道などの雨の文明では、雨を俯瞰的にとらえてしまい、雨と人とのつながりが薄れてきたと指摘され、世界中の人々によって生活のなかで培われてきた「雨の文化」を見直そうという主旨のことが述べられました。

日本下水文化研究会として、今回雨の文化ということに関わることはできませんでしたが、「下水文化」を名乗る以上、雨水の文化も活動の範疇にできないかという思いも募りました。

この会議のテーマは、世界の水危機を救おうということでした。雨水は有力な飲料水源になります。とくに日本と同じアジアモンスーン地域の国々に当てはまることです。海外からの参加者の多くもアジアのモンスーン地域から来られました。下水文化研究会が活動しているバングラデシュ

からもプラマニク氏、ヌルツァーマン氏が来日され、貴重な講演をされました。プラマニク氏はヒ素汚染対策として雨水への飲料水源の転換、ヌルツァーマン氏は沿岸地域で地下水が塩水化している地域での雨水利用を訴えました。私は「世界雨水サミット」での発言として、この貴重な雨水も衛生インフラがきちんとしていなければ、汚染されてしまい、安全な飲料水源にならないこと、つまり水危機解消にとって、衛生の重要性を述べる機会を得ました。多くの日本人にとっては、雨水と衛生の関係はなかなか理解できないかもしれませんが、国連ミレニアム開発目標でも水と衛生はワンセットで取上げられています。

このほか、7つの分科会のひとつである「雨を捨てない保水型都市」分科会にも参加しました。これについては、下水文化研究発表会で報告しますが、都市で起きている気候の異変やヒートアイランド現象は、都市の保水力が異常に低下したことが一因となっており、近年の集中豪雨に伴う都市型水害の頻発にもつながっている可能性があります。エンドオブパイプの貯留施設だけに依存するのでは、保水力は回復しないままです。我々の足元からの水循環を見直そうということで、下水道関係者として水に関わる新たな文化創造につながるテーマだと思います。

浅学の身を顧みず、いくつもの重責を引き受けてしまい、期待されていた貢献はできなかったのではないかと反省していますが、多くの人と交流できるチャンスが得られ、今後も研究や活動を継続していく必要があることとその方向性の一端を確認できたように思います。関係された方々に深謝いたします。

雨水東京国際会議・東京宣言

雨水東京国際会議で東京宣言が採択されました。その要旨を紹介します。全文は下記のweb siteに掲載されています。

<http://www.tap-skywater.jp/declaration-j.html>

前文では、21世紀には大洪水と大干ばつの発生による食の危機、水と食の争い、安全な飲み水を確保できない10億を超える人口など水の問題は持続可能な社会の実現の鍵を握っていると訴え、新たな水の危機管理を求めています。一方、先進国に対しては、雨と人との関係の希薄化を次のように指摘しています。「上下水道が普及し、暮らしが便利になった反面、雨が身近な暮らしから遠ざかってしまった。人々は雨によって活かされていることに気づかなくなり、雨に親しむことも、感謝することもなくなってしまいました。しかし、それは間違いでした。雨は天の恵みです。万物の命の源です。雨は命ある存在です。そして雨は私たちの暮らしを支え、多様な文化を育む根源なのです」

そして、生命と文化を育む雨の視点から水危機の本質に迫り、その打開策を議論するなかで達した結論として、10箇条の行動宣言を謳っています。これらには、7つの分科会の結論も含まれています。

1. 私たちは（以下主語省略）大地と空の間を循環している雨水をスカイウォーターと呼びます。誰もが手に入れることができ、安全な飲み水の水源であるスカイウォーターを積極的に活用し、飲み水の危機を打開していきます。

2. 地球規模で大気汚染の防止に取り組み、きれいな雨を未来人に伝えていきます。
3. 雨を排除しすぎて乾燥化してしまった都市を、雨水をため、地下にしみこませ、そして活用することによって、潤いのある「保水型都市」へと作り変えていきます。
4. 節水を徹底し、雨水をたくわえ、水源の自立を目指します。また、小規模で分散した水源をライフポイントとして計画的に地域に整備し、災害に強いまちを目指します。
5. 森林の整備と保全を強化する「緑のダム」づくりを推進します。
6. 都市の水と土と緑を一体のものと捉え、地域から雨を活かした緑豊かなまちづくりを推進します。
7. 雨を大切にすくらし、文化を未来人に伝えていきます。また、雨の体験学習を通して豊かな感性を育み、地域から地球的に行動する人を育てていきます。
8. 水循環を活かした持続可能な農業を推進していきます。
9. アジア・太平洋のスカイウォーターネットワークの活動と交流の拠点を整備してアジアの水危機を打開し、雨と文化の問題を究めていきます。
10. 戦争のタンク（戦車）より、平和のタンク（雨のタンク）を。雨を分け合い、雨を活かして平和を守ります。
"No more tanks for war, Tanks for peace !"

第34回 定例研究会報告「衛生改善は貧困削減に貢献する」

8月13日(土)、東京雨水国際会議参加のため来日されたバングラデシュの NGO、SPACE の事務局長アジャール・アリ・ブラマニク氏に定例研究会講演を願いました。演題は、「衛生改善は貧困削減に貢献する」です。運営委員の佐藤八雷さんから報告してもらいます。

* *

アジャール氏は最初に「バ国」の貧しさの現状を紹介され、現在もなお国家戦略の発動にもかかわらず遅々として衛生状態が改善されない現状を話された。そして衛生環境の悪さが貧富の差をさらに広げることになる事例を、すな



わち貧しいがゆえに益々貧しくなっていく理由をサンテーションと関連づけて細かに説明された。「バ国」の貧しい人たちは日常的に以下のような状態に置かれている。

病気した時は予期せぬ出費のために、なけなしの貯金をはたいて、医者には掛からざるを得ない。金がない場合は、財産の一部あるいは家畜か家財道具

を売るか、高利貸から高利の金を借金する羽目になる。働き手が病気になった場合は一時的に収入が途絶え、父親か母親の死を迎えた子供たちは悲惨な生活を余儀なくされる。

子供たちが病気になった場合当分は学校へ行けなくなり、教育の機会が失われる。子供は5～6人の内、2～3人が生き残るのが常であるため、母親の出産回数が増え、妊婦としてのリスクが増すと同時に、人口の抑制も困難となり女性



性の自立の障害となって社会参加が遅れる。貧しい家庭の女子は早すぎる結婚を強いられる場合がある。

日常的に良い衛生環境に恵まれていると上記のリスクは解消され、貯蓄が出来て子供たちの教育の機会が十分に満たされることになるというわけである。人口爆発も抑制され、途上国の貧困が軽減されることになる。

(運営委員 佐藤八雷)

第37回尿尿研究会例会報告「大正8年の尿尿問題—その定量的検討—」

9月2日(金)、東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターにおいて、第37回の尿尿研究会例会が行われました。講話者は本会運営委員でもあり、また「ごみ文化研究会」の幹事でもあります稲村光郎氏にお願いをしました。講話は、演題にもありますように、資料として各種のグラフや表を使つての、有価物であった尿尿が廃棄物視されるようになった転換期(大正8年)における、尿尿を巡る定量的な検討となりました。講話の骨子は次のとおりです。

- ① 労賃(日雇い)が、第一次世界大戦(大正3年～大正7年)を契機に、5年間で3倍にも跳ね上がるような上昇をし、以後も物価低落にかかわらず暫くは下がらない状態となる。
- ② 東京府内の尿尿の消費量は、大正年間を通じて緩やかな伸びを示している。
- ③ 一方、東京市中心部の尿尿の輸送先を昭和4年のデータでみると、東京府内を1とすると、他県が3となっており、他県への依存度が高い。

- ④ 東京での肥料の価格を大正8年でみると、含有窒素成分1貫当たりでは、人糞尿 2.60 円、硫酸アンモニア 6.82 円、大豆粕 6.04 円などであり、人糞尿は比較的割安である。

- ⑤ 千葉県での大正8年のデータでは、前年より尿尿の価格が高騰したため消費量が4割も減少している。またその単価は東京に比し約3倍であり、これは他肥料と比べ安価とは言えない。

- ⑥ 硫酸アンモニアは、全国的にみると大正11年までは年4万トン(窒素換算)以下の消費量で、これは尿尿の半分以下であり、尿尿と競合するのはそれ以後である。

これらのことを総合的に勘案すると、含有する肥料成分の割にはかさばる尿尿は、大正半ばに至って、他県への運搬に要する人件費に見合うだけの販売価格を維持できなくなり、次第に廃棄物化していったものと考えられる。

(尿尿研究会会長 地田修一)

第37回定例研究会のご案内

平成17年度における3回目、通算36回目の日本下水文化研究会の定例研究会を下記の要領で行います。講師の上田恵一氏は、水処理メーカーを定年退職後、JICAのシニアボランティアとして海外技術支援活動に参加されました。今回はヨルダンにおけるその活動経験を語っていただくとともに、最近の中東の状況を報告してもらいます。本会もボランティアで海外支援活動を進めているところで、タイムリーな講演になると思います。ふるってご参加ください。

記

日時：平成17年12月2日(金) 午後6時30分～8時30分

講師：上田恵一 氏(元(株)昭和エンジニアリング)

演題：ヨルダンにおける下水処理水の灌がい用水化—JICAシニアボランティア活動に参加して—

場所：東京・飯田橋の東京ボランティア・市民活動センターB会議室(セントラルプラザ10階)

電話 03-3235-1171 交通 JR・地下鉄飯田橋駅下車1分

2回目のバングラデシュ訪問記

京都大学大学院 福島 陽介

私にとって、今回の滞在は2回目（1回目の滞在は2年前）になります。修士論文の研究テーマとして、現地のヒ素汚染災害の軽減に関して考えており、滞在中自分なりに、現地のヒ素汚染と、そこに住む住民の考え方、悩み、生活様式等に関して特に着目しておりました。

まず、非常に暑く、汗が滝のように流れる中、様々な場所に来て行っていただき、また、実際にスリナガルに数日間滞在する機会や、現地NGOやUNICEFの方に話を聞く機会までいただき、酒井先生、高橋さん、保坂さん、トファエルさん、また、アジャールさんをはじめとするSPACEの皆様へ感謝したいと思います。

ヒ素汚染災害に関して、様々な村を訪れることが出来ました。2年前に現地に訪れたときは、ヒ素除去装置やダグウェルなど様々な対策がなされているものの、現地の社会環境に合わず、全く功を奏していないといったことが印象的でしたが、今回見ている限り、まだまだ不十分であるにせよ、徐々にそういった状況も改善されつつあるように思いました。実際に現在現地で使用されている装置や深井戸など、その導入時期を聞いてみると1,2年前以内であるものが多かったこともあり、やはりここ2年くらいで状況も少しずつ変わってきたようです。ただ、どういった対策も一長一短でこれといったものがないこと、ヒ素汚染が広がっていること（今までヒ素が検出されていなかった井戸でも、ヒ素が検出されることがよくある）、安全な水を得るために依然として多くの人（特に女性）が遠くまで水を汲みに行っていることなど考えると、やはりまだまだ根本的には状況は変わっていないと言えます。

今回は、初めて毎年洪水の影響を受ける村、スリナガルに行くことが出来ました。乾期は水がひいて陸続きになるようですが、雨季は低地がごとごとく水につかり、村が多くの島から成りたっているように見えます。毎日、多くの人（女性）がボートや竹で作った簡単な橋を使って、安全な井戸まで水を汲みに行きます。話を聞いていると、皆口をそろえて、水運びが大変だと言っていたことが印象的です。しかも文化的な背景から女性（特に若い女性）は人前には出来るだけ出たくないため、女性にとって水運びは精神的にも負担になっているとのことでした。こういった負担が大きすぎるため、ヒ素のことを知っていながらも、やむなくヒ素に汚染された井戸から水を飲んでいる人もいます。もちろん家庭レベルで使用できる装置はありますが、到底買えない（またそれだけのモチベーションがない）ようです。これらを考えると、やはり、ヒ素汚染災害は現地の社会・自然環境に深く結びついており、その軽減は非常に難しい問題であると改めて感じました。

現地で最ももどかしかったことは、言葉が通じないことでした。村を1人で歩いていると珍しそうに多くの子供達が寄ってきます。（おそらく）好意をもってくれており、色んなことを言っていますが、ほとんど全く理解できない

し、コミュニケーションがほとんど取れません。村でヒアリングしているときに関しても、もちろん常にトファエルさんやアジャールさんに聞いて、英語で通訳してもらっていましたが、2年前に比べて自分の英語力の上達により、かなりの情報量を得ることが出来るようになっていましたが、それでも限界があるように感じました。村人のちょっとした小言とか世間話、それに伴う表情の変化とか、現地語を知らない限り、入手できないような情報は非常に多くあるように思えました。海外での調査の難しさを感じたと共に、現地語を学ぶことは非常に重要であるように思えました。

現地で最も嬉しかったことは、想像以上に現地の人がウェルカムだったことです。とくにスリナガルに滞在することに関して、当初、わけの分からない日本人の学生が村に来て、現地の人はどう思うのだろうか？何らかの不信感を抱かせるだけではないだろうか？など不安でしたが、それは杞憂に終わりました。皆非常に好意的に接してくれましたし、現地を歩いて話を聞いていると、果物や飲み物、スナックなどをくれる家が多く、昼ごはんをご馳走してくれる家までありました。比較的裕福な村だったこと、単純に外国人が珍しいとなどもあるでしょうが、どうやら、現地の人に話を聞いていると、これは日本のODAや、NGOの活動が現地で評価されているといったこともあるようでした。日本にいと、なかなかこういった活動に興味を持ちにくく、海外でどのような活動がされているのかなど、ほとんど知らなかったのですが、今自分がこのような好意的な扱いをされている裏には、様々な人の活動があるものだといったことを感じました。

スリナガルにて、子供にボートを乗せてもらっているとき、運悪く（運良く？）池にはまってしまうことがありました。ちょうどボートから降りるときに、足を滑らせ、そのまま池にドボンっといった感じです。首あたりまで水に



手漕ぎボートで村を巡る



つかってしまい、何とか手を伸ばし、陸地にカメラを放り投げて、カメラだけは死守したものの、地図作成のために持ち歩いていたGPSを水につけてしまいました。気づいたときには時すでに遅く、その後の調査では、GPSは使えなくなっていました。「だから気をつけろって言ったのに…」とトファエルさんが半分笑いながら言い、周りで見ている子供たちは笑い転げんばかりに、私を見て笑っていました。池に落ちる大人なんて見たことがないといった感じでした。落ちた瞬間は絶望感にかられていましたが、周りで笑っている子供やおばちゃんたちを見て、もうどうでもいいやつといった気持ちになりました。その後、村を歩いていると、他のおばちゃんに、「あんた、見てたわよ」といった感じで笑いながら話しかけられることもありました。どうやら遠くから見られていたようです。なんとも



村の人たちと(後列右から3人目がトファエルさん)

かんとも、自分のドンくさに恥ずかしくもなりながらも、村人に私の存在を幾分身近なものに感じてもらえるようになった気がして、悪くない気分でした。その後はサンダルで村を歩くことにし、村人に「はまるから、やめといったほうがいい」と言われながらも、ウォーターヒヤシンスを集めて作られた、非常に不安定な浮橋に挑戦するなど、もはや池にはまることの抵抗感もなくなり、その分、私としても、村人との距離が縮まったような気がしました。言葉の壁をもどかしく感じながらも、なんからのきっかけで、一気に村人との距離感が縮まるものだと感じました。当初、カメラ、GPS、万歩計、磁石、靴、長ズボン、ノートといった全く現地に似つかわしくない、動きにくい重装備(短い期間の調査だったので仕方ありませんが)で歩いていましたが、自分自身が自ら彼らとの間にバリアを作りだしてしまっていたのかも知れません。スリナガルでの滞在はわずか5日ほどでしたが、エアコンもシャワーもなく、ベッドも1つしかない部屋でトファエルさんと汗だくになりながら一緒に寝泊りし、毎晩のように蚊と停電に悩まされ、昼間はリキシャと手こきボートと徒歩で村を動き回り、本当の意味でバングラデシュに来たということを実感することが出来ました。

今回は、2週間以上のバングラデシュでの滞在で、毎日毎日カレーの生活には正直きびしいものがあり、チリには全く慣れることが出来ませんでした。やはり、現地に行き、実際に見て、聞いて、食べて、飲んで、匂って、感じて、何ぼのもんだと思いました。今後、ヒ素汚染災害に関して自分に出来ることは何かをしっかりと考え、常に今回の現地滞在を振り返り、絵に描いた餅にならないように、研究に取り組んでいきたいと思っています。

バングラデシュ・スタディツアーに参加して

流通科学大学 樽井 豪

バングラデシュという国に持っていたイメージははじめ貧しい国だと聞いていたので乞食が多く、農村はもちろんのこと、都市部も閑散としたものをイメージしていましたが、首都はもとより都市部といわれるところは色々な店が並び、近代的なビルもあり少しそのイメージが変わりました。バングラに行き一番感動というか印象に残ったのは農村の人々の温かさです。日本人は外人を見ると話しかけるどころか萎縮して全く話せない人が多いと思いますが、この国の人々は肌の色も違う僕らに臆すことなく話しかけ色々なことを教えてくれます。とは言っても言葉はわからないので勘で話しているのだからちゃんと意味が通じてたかはわかりませんが、あの時僕も村の人々も笑顔でいられたので国際交流できてたんだな、と勝手に思い込むことにしています。で、肝心のトイレですが酒井先生がおっしゃるにはどうやらきれいに使われているようです。僕はトイレやらなんやらそんな知識は全くありませんが、先生達が作ったトイレを見て他のトイレのない農村に作ってあげば普及するんじゃないかと思います。ただトイレの周りには何か臭いです。よく見ると明らかに人糞が落ちてたりします。トイレの横であえて糞をする、我慢しきれなかったんでしょうか、しかも処理しない、この自然に任せろ的なノリもバングラの魅力だと思っています。食事はカレーだ

と聞いてたので耐えられる心配でしたが野菜やらチキンやらマトンやら色々なカレーが食卓にならんでいたのて飽きる事はなかったです。たまにえらく辛いカレーにぶつかったときは泣きそうになりましたが、、、ともあれ今回のスタディツアー、知識のない僕にとっては見るものすべてが新鮮で楽しかっただけで終わりましたが、次回行く機会があれば今度は何か目的を持って行きたいと思いました。



村の人たちと

海外技術協力活動の経過報告

今年度も地球環境基金助成金が採択され、活動を継続しています。昨年度は、BARD という政府組織のメンバーの協力を得て、15 基のトイレを建設しましたが、そのフォローアップを進めながら、同時に昨年予定していた地域での活動を再開しました。今年、パートナーを組んでいる現地 NGO は Society for People's Actions in Change and Equity (SPACE) という団体で、8 月に定例研究会で講演していただいたプラマニク氏が事務局長を努めています。

昨年度建設し、今年度から利用されているトイレの状況は順調です。ほぼ半年間使用したので、2 槽ある便槽のうち、最初に使用した槽から、もうひとつの便槽の使用へ移りました。便槽の乾燥状況も良好です。また、利用者も衛生的なトイレに満足しています。すべての世帯ではないのですが、尿は畑や庭の野菜に散布されています。7 月ごろに家族数が最も多い世帯（奥さんが 3 人いて家族数は 20 人を越える）で便槽がいっぱいになったと思われたので、ドラム缶に移そうとしましたが、槽内にはまだ十分なスペースがあり、結局 6 ヶ月間ひとつの槽で足りました。便槽からはほとんど臭気もない状況です。これから貯留期間に入りますが、6 ヶ月以上使用できることがわかったので、貯留期間をもう少し長く取れるところは取ろうと思います。

一方、Srinagar という Upazila（郡）で再開したプロジェクトの方も順調に進んでいます。福島君のレポートにもあったように、8 月の訪問時は宅地以外は水の下でしたが、この郡のなかで 3 つの村を決めました。この折、地元で Launching Workshop という催しを行い、地元関係者との調整にも問題ないようです。当初は政府が普及を進めているトイレとはタイプが違うので、政府の地方機関から異論も出るかと思っていましたが、杞憂に終わりました。現在は、トイレ設置世帯を選ぶために、村の人たちへの動機付けとアンケート調査を行っています。こうした調査をベースライン調査と称し、今月中には結果がまとまるということです。

次回訪問は 12 月はじめを予定しており、工事をする人々へのトレーニングから初めて、工事の監督、地図作成を行うことにしています。

このような活動を、分科会の少ない人数だけで対応することは容易ではありませんが、幸い今年度から現地の信頼おける友人が我々のために働いてくれています。それが福島レポートで紹介されているトファエル氏でたいへん有能で律儀な人物です。

今は地球環境基金の助成で活動していますが、次のステップとして JICA の草の根技術協力事業に提案書を提出しています。近く有識者の意見をもらうことになっています。この事業では、JICA がプロジェクトとして認めたあと、相手国政府の了承取り付けが必要になるのですが、バングラデシュの場合、海外 NGO 登録が義務付けられ、その条件として現地事務所の設置があげられています。先日の運営委員会（10 月 6 日）で設置を了承し、現在 SPACE 内に仮の事務所を設けています。

2 箇所で開催している活動と来年度の準備と多忙を極めています。多くの会員の協力、支援があってこそ継続できるものと思っておりますので、よろしくお願いします。また、もっと情報開示の必要もありますので、活動報告等を「水道公論」誌に掲載する予定です。なかなか海外事業への将来展望も描けない状況ですが、会員の皆様からも忌憚のないご批判いただき、方向性を出していきたいと考えています。

（文責 酒井彰）



膝まで水につかりながら見送りに来た子供達

運営委員会・事務局より

- 本会は会員の皆様に納めていただく会費で活動を行っています。その会費を未納の会員には、再び会費請求書を送らせてもらいます。早急の支払いを切にお願いいたします。なお、請求書の送付と入れ違いにお支払いいただいた方には失礼をお許し願います。
- 定例研究会は度々関西で行ってききましたが、研究発表会を関西で行うのは、湖沼会議の関連イベントとして開催した以来 4 年ぶりです。関西支部の活動も軌道にのって参りましたので、関西でも活動への参加機会は飛躍的に増えていると思いますが、関西在住の会員はじめ是非ご参加ください。
- 先日、我々の海外活動のパートナーであるチョードリー氏（BARD）が来日され、その友人で日本滞在 10 余年のモハメド・アニスル・ラーマン氏と一緒に食事をした折、ラーマン氏に本会への入会をお勧めしたところ、過日入会されました。会費がバングラデシュのトイレ建設に結びつくことになったのかかもしれません。

編集後記 ▶「水は恋人」という曲をご存知ですか。最近バルトン忌がつなが縁でリバイバルしました。作詞は杉戸評議員、作曲は Waterman 氏（会員です）で 20 年以上前の曲ですが、Waterman 氏がバルトン忌に参加し、当日の講師岡崎氏と意気投合。その演奏を岡崎氏にお願いし、現在水道産業新聞のホームページで聞くことができます。皆さん本会の関係者ということでうれしい話です。▶今年もスタディツアーの参加記を書いてもらいました。もっと参加者を増やすためのアイデアを樽井君への宿題にしていますが、皆さんからもお願いします。（酒井 彰）

ふくりゅう 通巻44号目次

研究発表会開催案内 バルトン忌報告	1
雨水東京国際会議に参加して 雨水東京国際会議・東京宣言	2
第34回定例研究会報告 第37回尿尿研究会例会報告 第36回定例研究会のお知らせ	3
2回目のバングラデシュ訪問記	4
スタディツアーに参加して	5

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会
〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。